

九州派私記 山内重太郎

始めに

去る 9 月 23 日より 10 月 10 日まで、福岡市美術館に於いて「九州派展」が同館主催で開催された。

この展覧会は福岡市を中心とする若い画家、彫刻家によって、既成観念を排し、最大限に美術の可戦性を探求することを標榜して結成され、以後約 10 年開、福岡、東京でグループ展、読売アンデパンダン展、個展、詩人グループとの街頭展、詩画展等を発表の場とし、九州最初の前衛美術運動を展開したが、その終熄より既に 4 半世紀を経過して、半ば伝説の霧に閉ざされかけた、九州派の実像を白日の下に晒し、その光と影を鮮明にして、今日的意義を探ろうとして企てられたものである。

筆者は 1957 年、九州派結成から、59 年晩秋、派の運動路線を廻る論争の結果、決別して、オチ・オサム。菊畑茂久馬両君と洞窟派(保野衛氏命名、結成後 1 年にして解散する)を結成するまで、二年余所属していたに過ぎないが、脱退後も九州派の動向とその終熄後は、元会員達の活動の況に開心を持ち続けてきた。

今回、はからずも、本誌に紙幅を等えられたので、既に忘却の瀬に没しかけている記憶をかき立て、九州派に関する記録しておきたい事の幾つかを、その前史をも含め、私事、私情を交えて書き留める事にした。私記とした所以である。

(今回、福岡市美術館より、美術批評家、同館学芸員による評論、作品写真、年表、元会員の発言等が掲載された「九州派展図録」が刊行されたので明記しておきたい)